

陳述度？

—芳賀綏氏の書評に答えて—

三上章

拙著「現代語法序説」に対する、芳賀綏氏のご高評によって、統覚、陳述、陳述度などの用語に対する反省が必要になってきた。取りあえずここに「陳述度」の弁解を試みる。

英語動詞の活用形は定 (finite) の陳述形と、不定 (non-finite) の非陳述形とにセツ然兩分され、中間はない。さっぱりと歯切れがよい。次の大文字は陳述形、イタリックは非陳述形である。

if he COMES……

if he WILL come……

単文、重文、複文の区別は陳述形の個数や相互関係による。陳述形はセンテンスなりクローズなりのいわば責任者である。

日本語の「来レバ」は *if he COMES* に相当し、陳述形とも言えなければ、非陳述形とも言えない。割引き陳述形というくらい

なところかも知れない。「モシ」「タトイ」などを陳述の副詞と呼んでいるのは、この割引き陳述に係る副詞というつもりなのだろう。かりに「来レバ」や「来ルナラ」を陳述形と見なしても、それでは「来テハ」「来テモ」「来テ」「来」はどっちなのかと見てくると、陳述形を確定することは非常に困難である。責任者が確定しない以上、日本文法で重文だの複文だの言ってみただころでそれらを形式的に裏付けることができなう。

その代りに、我が活用形は言切りの完 (final) と係りの未完とに二分するほかに、この二分には歯切れの悪さがつきまとう。未完の末の字はいまだであり、やがてであって、未完はやがて——遅かれ早かれ完結するという約束を持っている。彼の不定は程度を欠く不定一式だが、我が未完

には完結までへの遠近のいくつかの程度がある。

甲、何々シテ……………文末

乙、何々スレバ……………文末

丙、何々シタカラ……………文末

点線の部分には長短さまざまな文句を入れることができるが、むやみに引伸ばすわけにはいかず、長さの自然な限度というものがあつた。丙の点線は最も短くて、ここにあまり長い文句を入れると不自然になるし、また点線部に使う活用形にも多少の制限がある。つまり「何々シタカラ」は文末近きを思わせる係りである。反対に甲は文末まで前途リョウ遠でありえる。子供に叙事文を書かせる時、朝起キテ、顔ヲ洗ツテ、ご飯ヲ食ベテ、テ、テ、テ、とたいへん長いセンテンスを書くことがある。そして齋線部に使う活用形にも全く制限がない。乙は甲と丙との中間の程度である。

彼が来レバ (直グ連絡、スル、カラ、君モ来テ) ホシイ

というふうに、乙の点線部に丙の係りを入れるのは簡単だが、この逆をやることは、不可能ではないが、すらすらとはいかない。

このようなはたらきを、各活用形（プラス付属辞）が発揮するこのような構文的機能をも、文末遠き弱から文末近き強（文末自身は最強！）までの陳述度と見なし、それを大まかな三段階に分けて単式、軟式、硬式、それに別格の遊式の四式を立てたのであった。

……阪倉、渡辺、芳賀諸氏によって文末の「陳述」が次第に明確にされつつあることは喜ばしい。それとともに、日本語の構文論を打建てるためには、文末以外の「係り」の役割を調べて行くことも必要なのでそのためにはやはり何らかの諸式を立てなければなるまい。というわけで単軟のアン式、コオ式、ユウ式にはなおしばらく執着したいが、陳述度という用語は不適當であった。以上の弁解をもって、この用語を解消したい。

—山本高校教諭—